

司式: 鮎川 健一

奏楽: 中井喜久子

前奏: 「来ませ聖霊、主なる神よ」(D. ブクステフーデ)

招詞: わたしは新しい心をあなたがたに与え、新しい霊をあなたがたの内に置く。(エゼ 36:26a)

讚美歌 12「とうときわが神よ」

交読詩編: 47【都に上る歌。ダビデの詩。】

01 【指揮者によって。コラの子の詩。賛歌。】

02 すべての民よ、手を打ち鳴らせ。神に向かって喜び歌い、叫びをあげよ。

03 主はいと高き神、畏るべき方/全地に君臨される偉大な王。

04 諸国の民を我らに従わせると宣言し/国々を我らの足もとに置かれた。

05 我らのために嗣業を選び/愛するヤコブの誇りとされた。〔セラ

06 神は歓呼の中を上られる。主は角笛の響きと共に上られる。

07 歌え、神に向かって歌え。歌え、我らの王に向かって歌え。

08 神は、全地の王/ほめ歌をうたって、告げ知らせよ。

09 神は諸国の上に王として君臨される。神は聖なる王座に着いておられる。

10 諸国の民から自由な人々が集められ/アブラハムの神の民となる。地の盾となる人々は神のもの。神は大いにあがめられる。

朗読聖書①詩編 27 編

01 【ダビデの詩。】主はわたしの光、わたしの救い/わたしは誰を恐れよう。主はわたしの命の岩/わたしは誰の前におののくことがあろう。

02 さいなむ者が迫り/わたしの肉を食い尽くそうとするが/わたしを苦しめるその敵こそ、かえって/よろめき倒れるであろう。

03 彼らがわたしに対して陣を敷いても/わたしの心は恐れない。わたしに向かって戦いを挑んで来て/わたしには確信がある。

04 ひとつのことを主に願ひ、それだけを求めよう。命のある限り、主の家に宿り/主を仰ぎ望んで喜びを得/その宮で朝を迎えることを。

05 災いの日には必ず、主はわたしを仮庵にひそませ/幕屋の奥深くに隠してくださる。岩の上に立たせ

06 群がる敵の上に頭を高く上げさせてくださる。わたしは主の幕屋でいけにえをささげ、歓声をあげ/主に向かって賛美の歌をうたう。

07 主よ、呼び求めるわたしの声を聞き/憐れんで、わたしに答えてください。

08 心よ、主はお前に言われる/「わたしの顔を尋ね求めよ」と。主よ、わたしは御顔を尋ね求めます。

09 御顔を隠すことなく、怒ることなく/あなたの僕を退けないでください。あなたはわたしの助け。救いの神よ、わたしを離れないでください/見捨てないでください。

10 父母はわたしを見捨てようとも/主は必ず、わたしを引き寄せてくださいます。

11 主よ、あなたの道を示し/平らな道に導いてください。わたしを陥れようとする者がいるのです。

12 貪欲な敵にわたしを渡さないでください。偽りの証人、不法を言い広める者が/わたしに逆らって立ちました。

13 わたしは信じます/命あるものの地で主の恵みを見ることを。

14 主を待ち望め/雄々しくあれ、心を強くせよ。主を待ち望め。

◆はしがき

01-02 テオフィロさま、わたしは先に第一巻を著して、イエスが去り、また教え始めてから、お選びになった使徒たちに聖霊を通して指図を与え、天に上げられた日までのすべてのことについて書き記しました。

◆約束の聖霊

03 イエスは苦難を受けた後、御自分が生きていることを、数多くの証拠をもって使徒たちに示し、四十日にわたって彼らに現れ、神の国について話された。

04 そして、彼らと食事を共にしていたとき、こう命じられた。「エルサレムを離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。

05 ヨハネは水で洗礼を授けたが、あなたがたは間もなく聖霊による<sup>バプテスマ</sup>洗礼を授けられるからである。」

### 祈禱

天地万物を造られ御支配為さる父なる御神さま、聖名を褒め称え賛美致します。今朝も新たな命にあつて日を重ね、造り主なる父、救い主なる御子イエス、助け主なる御霊・聖霊の三一なる神に招かれ感謝致します。

聖霊降臨日を迎え教会の出来事が興されたことを思い興します。主の真理によって信ずる者を聖別し、主の御霊により与えられた使命に答え得るよう支え導いてください。

思い返す日々は弱きに罪を重ね、主の御心から遠くあつたことを覚えます。ここに改めて主の御赦しを希います。

慈愛に富み給う主なる神は、私たちを礼拝に招き、ライブ配信と共に時を同じくして、夫々の地にあつて礼拝を備えられ、感謝致します。尚、この世にあつては、心憂うこと多々あり、私たちは聖霊の力なくしては信仰も定まらず、前にも進めません。聖霊なる神の息吹により、私たちは新たに生きる力、生きる希望へと導かれ、心清められ、また心と体を癒されます。

聖霊の力により信仰共同体は生まれ、神の言葉と行いが証しされ、この世に救いの希望が伝えられています。その中で、教会の働きが興され、今もなお、キリストの福音が宣べ伝えられていることを、宣教の場があり続けていることを覚えます。

多くの課題に直面する私たちですが、救い主なる神の御子イエスは、十字架の死より復活され、弟子たちに息を吹きかけて、「聖霊を受けなさい」と告げてくださったことを思い、受け留めます。主の御力により頼みつつ、世界の平和、日本の平和のためにも祈ります。今なお、世界情勢は揺れ動き、自然災害の中で不安や悲しみに置かれています。聖霊降臨日を迎えたこの時に、主の慰めと癒しが特別にありますように。また、どうか、一日も早く混乱が治まり、共に主を見上げ、神の息吹に力を与えられて、主の平和の道を歩めますように。

世界を統べ治め給う主よ、あなたはこの世に見えるも見えざるも、教会をお立てくださり、真理の道を備えてくださいました。「教会は主の御体、主の大なる御力が満ち満ちているところ」と告白します。私たちは世界の教会と共に、信濃町教会宣教 100 周年を見据えながら、主の幹に繋がる肢にある大なる恵みに感謝致します。どうか為し得る業を一人ひとり、与えられた賜物を用いられながら、共に信仰を深め、共に歩む者とならせてください。

これより佃雅之牧師の口を通して御言葉が取り次がれます。御霊の導きを豊かに受けられますように。また聴く私たちも、御霊の力を受け、新た

な命と共に、ここから遣わされていきますように。

“マラナ・タ(主よ、来たりませ)”と祈り願い、“主の御国が来ますように”と主の平和を願いつつ、尊き主イエス・キリストの聖名によって御前にお献げ致します。アーメン。

教会学校教師任職式(野呂道子、綿引道子)

讃美歌:345「聖霊の力にあふれ」

説教:「聖霊の約束」

佃 雅之

今日は聖霊降臨日です。教会では“ペンテコステ”とも言われ、聖書の書かれたギリシヤ語(πεντηκοστή-ης)では「50番目」という意味の言葉です。キリストが復活されたイースターから数えて50日目に、キリストに従ってきた人たちに聖霊が降り、大胆に“イエスは救い主である”と宣傳え始めます。聖霊降臨によってキリストの弟子たちは、聴く者、教わる者から、遣わされて“主イエスの行いと御業を伝える使徒”と呼ばれるように変えられます。使徒たちの働きと行いによって、教会の歩みが始まったことから、ペンテコステは“教会の誕生日”と言われることがあります。教会の誕生、つまり使徒たちによる伝道の開始を知らせる聖霊降臨の出来事は2章に詳しく書かれています。今日は、1章を読みました。来る6月2日、信濃町教会は100回目の誕生日を迎えます。“教会が誕生する前に何があったのか、復活のキリストは弟子たちに何を語られたのか”、皆さんと一緒に聖書に聞きたいと思います。

「わたしは先に第一巻を著して」とあります。『使徒言行録』は『ルカによる福音書』と連続した一つの書物であったと言われていました。ルカは先ず、キリストの地上における出来事を書きました。キリストの教えの頂点は“十字架と復活”にあります。ですからキリストの死と復活の出来事と切り離して使徒言行録を読むことは出来ません。キリストは繰り返し十字架と復活の意味を教えてくださいましたが、弟子たちが考えていたことは、“神の国で自分たちはいったいどういう位置に就けるのか、誰がキリストの右に座するのか、誰が左に座するのか(マコ10:35-45)」、いわば、“この中で誰が一番偉いのか(ルカ9:46,22:25)”と論争をしていたのです。しかし、地上での最後の時、キリストを裏切り、見捨て、逃げて隠れたのが弟子たちでした。それでもキリストは弟子たちを見捨てません。復活されたキリストは弟子たちにご自分を顕してください、「四十日にわたって」、改めて「神の国について話」してくださいました。「神の国(βασιλεία)」は「神の支配」とも訳すことが出来ます。

「四十」というのは、聖書では特別な意味を含んだ言葉で、いろいろな所に出てきます。“モーセに率いられた出エジプトの40年(出7:17)”, “ノアの洪水の時の40日40夜(創7:17)”, “キリストが宣教をお始めになる前の40日の断食(ルカ4:2並行)”, いずれも苦しみ悩む時間であり、御心を求め、祈りを深める時間です。信濃町教会が宣教の記録(『信濃町教会四十年一時の間に(1964)』)を初めてまとめて書き上げたのも教会の誕生から40年を覚えての時でした。40という数字は聖書に記された歴史から見れば、ある段階から次の段階に移行する間の時間とも思えます。今日の個所から、“人となられたキリストが地上と共に歩んでくださった福音書の時代が終わり、教会の時の始まり”です。弟子たちが使徒となる訓練を積み重ねるための時間です。

今日の礼拝の中で、二人の姉妹が教会学校教師の任職を受けられました。この姉妹たちも、或る時、主に呼び出され、霊に導かれて教会に連なる者となった人たちです。そして、教会生活の中で必要な訓練の期間を過ごし

て聴く者から語る者へ、教わる者から教える者に変えられました。これからお二人は、教会に集う子供たちに「神の国」を伝えていくものになります。この志を与えてくださったのは主からの霊であります。教会に導かれるのも聖霊の導きです。“イエスをキリスト・救い主”と信じて告白することが出来るのも聖霊の導きです。聖書の御言葉を取り次ぐことも聖霊の導きです。

御言葉に向き合う中で、悩むことも苦しい事もあると思います。しかしキリストが弟子を見放すことは決してありません。必要な言葉は主が与えてくださいます。“祈りつつ待つ”ことです。今日の個所でも、キリストは弟子たちに、「エルサレムを離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。」と言われていました。

私たちの信仰にとって「待つ(περιμένω)」ことは大切なことでもあります。しかし、待つにしても、何もせず、ただ待てばよいというわけではないでしょう。私たちが問われているのは、“どのような待ちかたをするか”、ということです。「待ちなさい」と主が言われる時、私たちは福音書の中で、キリストがいろいろな喩え話を用いて、何かを待っている人たちの姿を語ってくださったことを思い起こします。“花婿の到着を待っている10人の乙女の話(マタ25:1-13)”, “婚宴から帰ってくる主人を待っている僕の話(ルカ12:35~)”, “主人から旅に出ている間タラントンを預かった僕たちの話(25:14-30)”もあります。これらの喩え話を通して、私たちに与えられる教えは、“何時も目を覚まして待っていなければならない”、“準備を整えて待っていなければならない”、ということです。10人の乙女の譬え話であれば、“ともし火を灯す油を何時も用意しておく”ことです。婚宴から帰ってくる主人を待っている僕の話であれば、“腰の帯を締め、ともし火を灯して待っていなければならない”ということです。タラントンの譬え話なら、主人が帰ってくる間に“与ったタラントンを有効に用いたかどうか”が問われるのです。いずれも、“ただ待つのではなく、目を覚まして、つまり心の目を開いて、与えられた時の間に、精一杯の働きをしなければならない”ということでもあります。

キリストは弟子たちを使徒としての働きに就かせるために、「約束されたものを待ちなさい」と言われました。彼らに、これから委ねようとしていることが如何に重大なものであるか、困難なものであるかがよく分かるために、“準備が整うまで福音伝道の活動を禁じた”、ということでもあります。

福音の伝道が禁じられることがあるということに驚きます。しかし、何事においても準備が整っていないまま活動を始めたなら、良い結果が生まれることはないでしょう。宣傳えられるべき福音は欠けの多いものになります。ほんの少しでもうまくいかないことがあれば召命感を失い、挫折することにもなるでしょう。「心は燃えていても、肉体は弱い。」(マタ26:41. マコ14:38)ということもあります。

今日の個所の初めに「聖霊を通して指図を与える」との言葉がありました。『聖霊の指図』は、“私たちのしようとする活動を禁じる”という形で表されることがあります。教会では第一水曜日朝の祈禱会で使徒言行録を読んでいました。今月読みました16章は、“福音がよいよ使徒パウロたちの働きによってヨーロッパに向かう”という場面でした。聖書はこの時、パウロが本当はギリシヤではなくエフェソに向かいたかったのに、“聖霊が禁じた”、“イエスの霊がそれを許さなかった(16:7)”と伝えています。聖霊が行き先を妨害したのは、使徒たちの歩みを“神の備えられた道へと導く徴”であったということです。思うようにいかない、成果が出ない、結果が出ない時、是非このことを思い出して欲しいのです。

神は時として聖霊を通じて、私たちの進みたいと願う道を塞ぐことがあ

る。しかしそれは神が私たちを、神ご自身が備えられた道へと導くための合図、徴なのです。物事がうまくいかなければ私たちは“今よりもっと深く祈るようになる”からです。“自分の願いを神に押し付けるような祈りから、神が願っておられることを私に気づかせてくれる祈りへ”と神の霊が変えてくださるのです。人間のこの世的な願いや思いばかりを優先して、あるいは人間関係で物事を判断するのではなく、聖霊の導きに従うことです。“祈る時は、神と私の間に何物も入れてはならない。父なる神と二人きりになって、お語り下さる神の言葉に従う”のです。迷いに迷って、祈りに祈ったその時、主が示される道に私たちは気づくことができます。主に信頼して新しい一歩を踏み出すことができるのです。

教会生活も、日々の暮らしにおいても、思い通りにいくこともあれば行かないこともあります。しかし、そこには聖霊の働きがある。後になって、これは『聖霊の指図』であったと分かることがあるものです。聖霊は主の言葉を思い興させてくださり、私たちの心の目を開かせてくださるものがあります。聖書を読んでいても、聖霊についてよく分からない、実感できないという方もあるかも知れません。しかし聖霊を実感できない本当の理由は、私たちの内にある肉の欲、自己中心的な思いにあります。私たちが悔い改めることなく肉の思いに従い続けるなら、聖霊は悲しみつつ去って行かれるということになるでしょう。

聖霊は今、私たちと共にあって働かれています。日曜日の朝、教会に向かおうとする、この事がもう既に聖霊に導かれているという証拠があります。聖霊が導いてくださらなければ、礼拝に来ることも、キリストを信じることも、あるいは信じたいと思うことすら起こり得ないことなのです。

今日、教会に来られた方の中には洗礼を受けることを志している方もあるかも知れません。聖書について、自分にはまだ分からないことが沢山ある。はっきり分からないままで洗礼を志願してもいいのか悩んだことがない人はおそらく一人もいないでしょう。しかし、聖書が理解出来たら受洗が決意できるのでしょうか。牧師や信仰の先輩に問いかけ納得が出来たなら信じようと思うのでしょうか。聖書に書いてあることが分かった、だから信じよう、それが信仰でしょうか。時には大切な学びもあるでしょう。しかし“信仰とは、知るのではなく生きること”です。大切なことは、知識や経験に頼るのではなく、あなたに信じたいという思いを抱かせてくださった聖霊の導きを信じてスタートラインに立つことです。

使徒たちが聖霊を受けるために命じられたことは“待つ”ことと、もう一つ“エルサレムを離れない”ことでした。エルサレムは、キリストが十字架の死に至るまでの一週間を過ごした場所です。使徒たちの裏切り、弟子たちの躓きが深く刻み込まれた所です。弟子たちにとっては逃げ出したいような場所であったことでしょう。しかしキリストは、“そこに留まれ”と命じられました。“エルサレムこそが自分たちの罪を最も深く思い出させる場所”であるからです。

私たちにとっても、何処をスタートラインにするかということは大切なことです。自分の罪と弱さと破れが現れている、また刻み込まれているところから始めるのです。そこから逃げたり、自分の罪や情けなさを隠す必要はありません。むしろそこに踏み留まって、私たちの弱さと愚かさを顕わにすることから始めるのです。弟子たちがエルサレムに踏み留まること出来るのは、ここにこそ主の恵みと赦しがあり、再び立ち上がることが出来ると信じたからです。弟子たちを立ち上がらせるためにキリストは40

日に亘って弟子たちに説教をし、食事を共にされました。私たちにも日曜日ごとに御言葉を戴き、第一主日には主の食卓である聖餐の恵みに与ります。聖餐は罪の贖いと赦しと共に、私たち一人ひとりに新しい命が与えられることを明らかにするものであります。キリストの命を戴くことによって、私たちは躓きの場所から立ち上がることが出来るのです。後は使徒たちが、そして私たちがキリストの教えをしっかりと覚えているかどうかです。

教会の歴史は聖霊によって私たち一人ひとりが進むべき道を案内される出来事なのであります。宣教の主役は魅子の主であって、使徒たちはその道具であることをルカは示しています。今日の個所の最後に、「あなたがたは間もなく聖霊による洗<sup>バプテスマ</sup>礼を授けられる」と書かれています。事実、弟子たちは、この日の10日後、聖霊降臨を経験し、福音の宣べ伝えをはじめます。使徒言行録を読み進めると、聖霊降臨は一度だけでのことでないことが分かります。御言葉に聴き従い、主の聖霊を祈り求めるなら、聖霊は何度でも降されます。私たちが使徒たちに倣って、教会を離れず、父の約束されたものを待つ者でありたいと思います。聖霊に従い行く道は祝福された道です。**お祈りを致します。**

聖なる神、御前に集い、あなたにペンテコステの礼拝をお献げ出来ました幸いを心から感謝致します。

主よ、あなたの霊が私たちの内に宿り、何時も私たちに親しく語りかけ、働きかけてください。私たちがあなたのものとして、あなたにお応えして歩むことが出来ますように、どうぞ常に私たちを、あなたの御栄を表すためにお用い下さい。

御言葉によって心を強くし、主の再び来ることを待ち望みながら、新しい週を歩み出すことが出来ますように。

主、イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌:564「イエスは委ねられる」

献金・感謝(丸山みどり)・主の祈り(讃美歌21 93-5A)

主なる神さま、主にある兄弟姉妹と共に、礼拝を献げることが許されたことを感謝致します。説教を通して豊かに御言葉を与えてくださり感謝致します。私たちがこの一週間を、夫々の旅路の中で、御言葉を糧として歩むことが出来ますようにお導き下さい。

私たちは必要な物を与えられ、主の僕として生きることが許されていることを感謝致します。今、夫々が与えられた物の中から感謝と献身の徴を御前に献げます。どうぞ祝して教会の御用のために用いてください。

主が教えてくださった、「主の祈り」を共に祈り、新しい日々を迎えさせてください。「主の祈り」…アーメン。

派遣:讃美歌91「神の恵みゆたかに受けて」

祝福:主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたが一同と共にあるように。アーメン。

報告:週報訂正、教会学校 聖書 使徒言行録1章6-11節を2章1-8節に訂正

後奏:「来ませ聖霊よ」(J.S.バッハ)